

奈良・平城宮跡(第一八次)

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六四年(昭39)五月～六月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所
- 4 調査担当者 榎本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第一八次調査は一九六四年(昭和39)、宮の西辺——西面中門(佐伯門)と同南門(玉手門)の中間の地域でトレンチ発掘を行なったものである。調査区全体は南流する秋篠川の旧河道にあたり、宮造営時の埋め立て後も東西幅約二五m、深さ約一・一mのくぼみが残っていたことが知られた。遺構はこの上に認められ、東西に走る掘立柱塀等の他、特徴ある遺構を検出した。それは、南北三・五m、東西四m以上の方形の区画に木杭をめぐらした施設であり、その内側には径一・四m、深さは〇・七mをこえる円形の土壙が掘られていた。この杭列と土壙は一連のものと考えられ、土壙内の木炭を多くふくんだ堆積土中の遺物から、この地区に鍛冶関係の工房の存在が推定できるのである。木簡も一点が右の土壙より出土し、

釘に関する記載がみられるが、同時に出土した遺物は金属利器のた
めの木柄・轡口・鋳滓など特徴的なものであった。特に木製品とし
て、大量の鏝形・刀子形・座金形・鋌形・釘形・ピン形等の木製鏝
形、及び工具を構成する鎌柄・錐柄・刀子柄・鑿柄・鉋柄等とその
未成品が出土したことは注目される。また金属製品としても帯金具
・鉄鎌先・鉄釘・鉄針金等が出土しており、全体を通して鍛冶工房
の存在を推定する強い根拠となっている。

8 木筒の积文・内容

- (1) 「 \sphericalangle 打合釘廿」 87×17×5 032
- (2) × \square \square 形^{〔雲カ〕}二枚 \square 堺打下 \square × 091
- (3) × \square 平目釘一千六百 \square × 091
- (4) × \square 打合釘百^{〔後カ〕} 81×15×5 021

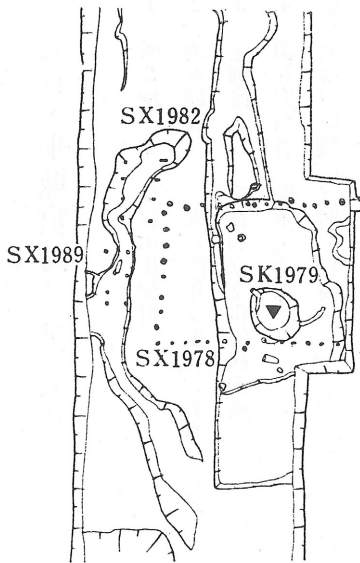
木筒は計一九点が出土したが、材の腐蝕したものが多く、判読し
得るものは少い。そのうち釘に関連した記載がほとんどである。(3)
の「平目釘」は正倉院文書にみえる「平頭釘」(「大日本古文書」一五
―三二六)と同じものか。(1)・(4)の「打合釘」も正倉院文書に散見
する(同上)。また(2)の「堺打」は銅製品を毛彫りする工程のこと
やはり正倉院文書中に銅工としての「堺打工」がみえる(同一六―

二九二)。

9 関係文献

- 田中 琢 「昭和39年度平城宮調査出土の木筒」
(『奈良国立文化財研究所年報一九六五』 一九六五年)
- 横山浩一 「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」
工業善通 (同右) 一九六五年
- 狩野 久 「平城京における廃棄物処理用の土壇
について」(奈良市『平城京の復原保存
計画に関する調査研究』) 一九七二年

- 奈良国立文化財研究所
同 『平城宮木筒二』 一九七四・五年
- 『平城宮発掘調査報告Ⅸ』 一九七八年 (佐藤 信)



木筒出土遺構図